



若 者

アメリカ生活雑感

高 木 昌 宏*

はじめに

私が小学生の頃に良く見たテレビ番組に、ご存じの方も多いと思うが、“奥様は魔女”というのがあった。新婚の奥様サマンサは、実は魔女で、様々な騒動を巻き起こすという設定のコメディで、おそらく1960年代のアメリカの普通の家庭を舞台にしていたのだろうと思うが、子供の私にとってそれはとてつもなく豊かな世界であった。ガレージに止めたオープンカー、キッチンの皿洗い機、キャンドルをはさんでの夕食と、どれをとっても我家の生活とはかけ離れており、いやがうえにも豊かな国アメリカを、強く意識させられたものであった。

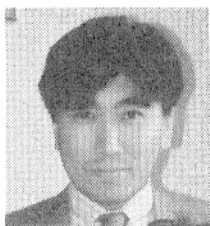
以来20年以上の歳月が流れ、世界情勢と共にアメリカも、日本も大きく変化したはずではあるが、やはり幼心に抱いたアメリカに対する憧れのようなものが、私の中に育まれており、さらに日頃目にする研究論文の多くがやはりアメリカの学者達によって書かれたものであることが拍車を駆けて、博士課程の学生であったころから是非アメリカの大学で研究生活を送りたいと思うようになったのである。

そんな私がついに1990年夏から2年間の予定でカリフォルニア大学デービス校(U. C. Davis)生化学教室へ留学する機会に恵まれた訳で、今回は、この書面をお借りして、私が実際にこちらの生活を通じて感じたことを、いく

つかの側面に分けて紹介したいと思う。

学生について

カリフォルニア州デービス市は、サンフランシスコの北東約100Kmに位置する人口約30,000人の小さな街で内20,000人は学生、教官など大学関係者で占められているいわゆる大学町である。気候は極めて温暖で1年の半分はTシャツ姿で十分過ごせるほどで、4月から10月までは殆ど雨も降らない。強い日差しの中、陽気な学生達が、自転車のみならずローラースケートやスケートボードに乗って通学している風景はいかにも西海岸の大学らしい。そんな一方、学生の98%はそれぞれの高校時代にトップ10%に入っていたという統計が示すように、彼らはいわゆる秀才で、キャンパスの中ではあちこちで暇を惜しんで勉学に励む姿を見かけることができる。私のU. C. Davisの学生に対する第一印象は、一見矛盾するようだが“陽気かつガリ勉”ということになる。実際、彼らはかなりしごかれている。講義は、秋、冬、春の3学期制で行われ、それぞれの学期に中間試験と期末試験があり、しかも熱心な教官による講義の中では宿題が非常に頻繁に出され、おまけに夏休みには補習授業まである念の入れようである。しかし逆に、学生達は各学期の終わりに教官の授業内容に関して“十分に準備して講義を行っていたか”“はっきりと分かりやすい説明が為されていたか”などといった細かい点についてまで評価することができ、その結果は教官ではなく大学当局によって管理されるシステムになっている。あまりの厳しさによる弊害も無くはないし、受験戦争で疲れきった日本の大学生達にこの厳しさは耐えられないという意見も聞かれたが、それでも日本の大学教育が見習う



*Masahiro TAKAGI
1959年8月14日生
1984年大阪大学大学院工学研究
科醸酵工学専攻修了
現在、大阪大学工学部応用生物
工学科、助手、工学博士、バイ
オテクノロジー
TEL 06-877-5111 (内線 4353)

べき点も多くあると感じた。

研究について

私は、生化学教室の研究室で自らの研究と併せて大学院生と学部学生の研究指導を受け持った。渡米前には、良く周囲の方々から“最新の設備を備えた恵まれた環境で云々”と言われて私も結構その気になっていた。しかし、興味深い研究内容とは裏腹に、設備面、技術面での日米隔差は殆ど無かったと言っても過言ではない。そしてこれは、アメリカの他大学へ留学中の諸兄からも聞く事実で、日本の研究室も技術、設備面では随分充実していたことをこちらに来て感じる事となった。

しかし、創造的でユニークな研究の多くは依然やはりアメリカの研究者によるものが多く、こうなると我々日本人研究者は、数年前ならいざ知らず、今や、設備がどうの、技術がどうのと言いつつはできない状況になりつつあることを認識せねばならない。確かに日本の研究レベルに対する評価は我々の分野においても着実に高まっているのは事実であるが、反面、より創造的な研究成果が望まれていることも見逃せない。国際的な文献は、そのほとんどが英文であるために日本人にはハンディがあるという事も一因であろうが、もっと根本的なところにも違いがあると私は考える。

例えば、そのひとつの例として、幼児教育の質的相違が研究者の意識の違いに反映しているのではないかという点を取り上げてみたい。

日本の場合、教育現場において最も重要視するのはやはり協調性であり、人に迷惑をかけず、協力できる個々人の社会的能力を養う場が学校であるという考えが支配的で他人と異なっていることを忌避する傾向がある。ところが、この話をアメリカ人の友人にしたところ、余りの違いに驚いていた。彼が言うには、子供の頃は、とにかく他人と違うことをするように教え込まれたと言うのだ。アメリカにおける幼児教育はまずは個性重視であり、教育現場において最も重要なのは、個々人が如何に他人と違うかを自ら示す能力を養うことなのだそうで、さらに“日本人は幼児教育の段階から労働者としての

クォリティコントロールが為されてるんだね。”と付け加えた。確かに、協調性は重要ではあるが、高度経済成長の波に乗り欧米に追いつけ追い越せと意気込んでいた時代の日本から、国際社会においてリーダーシップを取ることを望まれる経済大国日本へと転換したのと歩調を合わせて教育の現場においても質的な転換が必要なのではないかと考えさせられた。しかし、短絡的にアメリカにおける幼児教育が理想的と結論づけるのは危険で、こちらのあるテレビ番組で見かけた小学校の授業風景などは、個性重視と言う名を借りた単なる無秩序状態であった。結局、協調性と個性の座標軸の上でどのようにバランスを保つかということが重要で、そのさじ加減についてはいろいろ議論のあるところであろう。しかし、自戒の念も込めて少なくとも言えることは、先のような幼児教育をうけた日本人研究者は、より創造的な学問研究のために、追従と協調の上に安住せず、自らを意識的に啓発し続ける必要があるということであろう。

研究室を運営する上でのボスはもちろん教授(Professor)であるが、Associate ProfessorやAssistant Professorも、それぞれ独自の研究室を持っているので教官一人当りの仕事の量はかなりのものである。しかも、日本の大学のように文部省から一定額の子算が配分されるようなことはなく予算はすべてグラントとよばれる助成金によって賄われている。そのグラントの取得のために非常に詳細な研究計画書を提出せねばならず、その審査によって交付の可否が決定される。つまり研究者は常に新鮮な研究アイデアを出しつつエネルギーに働かねばならず、若い間はまだ良いが年輩になるとなかなか大変であろうと思うが、このシステムもアメリカの研究開発力の原動力となっていると言えよう。

一方、大学院生たちは、授業や学生実習の助手を勤めたり、または配属された研究室の教授からの援助により月1,000ドル程度の収入源があり、どうしても親に頼らねばならない日本のシステムとは大きく違っており、将来日本において大学院教育の拡充を図るのであれば院生に対する経済面でのサポートを充実させることも

忘れてはならないと感じた次第である。

日米関係について

こちらの学生達と接していると彼らの日本に対する関心の高さには驚くことが間々あり良く質問も受けた。その中には「どうして日本人女性は二重瞼の手術を受けるのか？」とか「どうして日本人はミッキーマウスがあれほど好きなのか？」のように一瞬答えに窮する質問もあり、また、盆栽や歌舞伎などの専門的な質問も受けてなかなか大変であった。湾岸戦争の最中の日本の国際協力に対する質問や批判には辛辣なものもあり、90億ドルという巨額の援助も時期を逸したためにアメリカの世論には殆ど響かなかったようである。そして昨年12月8日は、真珠湾攻撃50周年にあたり、テレビなどで特集が組まれていた。そのなかで「50年経った今日、再び日本は自動車やエレクトロニクスという名の爆弾をアメリカに落としている。」と言った論調の発言があり、また更に、近くの日系人学校や商店に対する嫌がらせもあり非常に不愉快に感じた覚えがある。確かに私の滞在中のアメリカ経済は、不況の真っ只中で倒産、レイオフなどが毎日のようにテレビや新聞で報道されており、かつての豊かさの象徴のような存在は影を潜めていた。そしてその不況の原因を対日貿易赤字に求める強い動きがあり、1月にブッシュ大統領が自動車業界の要人を連れて訪日したところより、経済問題における対日批判はピークを迎えたのである。自動車問題において大統領が日本に対して約束を取り付けた年間20,000台というアメリカ製自動車輸入枠にしても、こちらでは日本車が一日に約5,000台売れていると聞くと、これは4日分にしか相当せず政治的解決の困難さを物語っているようである。実際こちらで私自身いろいろな車乗り比べてみると、小型車における日本車の優位には揺るぎないものがあると感じた。そして、車検制度のないことが性能の差を拡大し、中古車として売際の価格が高いこと等が拍車をかけて日本車人気は非常に高く、アメリカ製自動車に乗っている私に日本車を勧めるアメリカ人も少なくなかった。こちらでの生活において車は必需品

で、故障で使えないときは手足をもがれた様な気になったものである。“BUY AMERICAN”というこちらでのキャンペーンも車のような生活必需品ともなると愛国心だけではどうにもならず結果的にアメリカ全体の3分の1は日本車という状態となった訳である。日本製品に対する需要と対日貿易赤字に対する批判が共存しているのだからこの問題は深刻である。アメリカの労働者の質が低いと言ってこちらで強い反感をかった日本の政治家の発言もあったが、労働者について言えば、米国内で販売されているホンダ、トヨタ等の人気車種は実はアメリカ人労働者の手による現地生産のものが多くを占めているのである。高度にオートメーション化のされた現代の自動車工場における品質や性能の問題は労働者ではなくむしろ設計やマネジメントと言った上層部に原因があるとこちらの専門家はみているようで、この件については私も同感である。

最近になってようやくアメリカも企業経営や雇用形態の変革のために真剣に取り組み始めており、不況のトンネルを抜け出す気配が感じられてきたが、日本も安くて良いものを大量にといった輸出依存の状態から一歩進んだ秩序ある貿易政策が必要となってきたのではないかと考えさせられた。

アメリカ人から見た日本について

こちらの人々の日本人のイメージは、勤勉そして、器用ということで大方一致しており優秀な工業製品がさらにその裏付けともなっているようである。しかし日本人の、特に若い世代の昨今における微妙な変化にすでに気づいているアメリカ人もいる。大学には英語会話短期集中講義があり、英語を集中的に学ぶために約2ヵ月間色々な国の学生を集めて講義を行うのだが、その教官の一人の話によると、夏休みなどは若い日本人で溢れるそうだ。そして彼女の言うには、その日本人学生達の英語学習の熱意がその人数の増加とは逆に最近失われつつあり、宿題をしない者や無断欠席する者などが非常に多くなったそうである。英語の勉強とは親への言い訳なのであろうか、決して安くない旅費と滞在

費と学費を無駄にする若者の感覚と彼らと共に歩む日本の将来をこの話を聞いて強く憂いたしだいである。

終わりに

今真っ最中の大統領選挙での争点は、(1)雇用 (2)医療保険 (3)教育の順と言われている。都会に出れば物請いをするホームレス達が群れを為し、かつて憧れた豊かなアメリカは既に消え失せたかの様相である。しかしその反面、郊外にはプール付きの家は珍しくなく、休日ともなればヨットや馬を牽引して旅に出かける家族連れがいる。日本の豊かさは、いわば底の浅さだと思うが、アメリカの豊かさはやはり天井の高さとも言えよう。慣れない土地での生活の

せいもあろうが日本人同士が集まるとついアメリカの悪口を言ってしまうが、それでも、やはりこれほど暖かく外国人を迎え入れることのできる国は他にはないであろう。今、帰国を間近にして、早く帰りたい思いと、もう少しここに居たい思いが交錯している。憧れが現実となり幻滅もしたが、それでもやはり仕事の面でも生活の面でも非常に魅力ある国であることだけは変わらなかったようである。平等と差別、自由と束縛、貧しさと豊かさ、優しさと冷酷さが、非常に幅広いレンジで渦巻いているアメリカ。そのなかで、この国は、かつての栄光を取り戻そうと躍起になっているようである。“奥様は魔女”の頃のアメリカに一番憧れていたのは私ではなくこの国自身だったのではなからうか。

